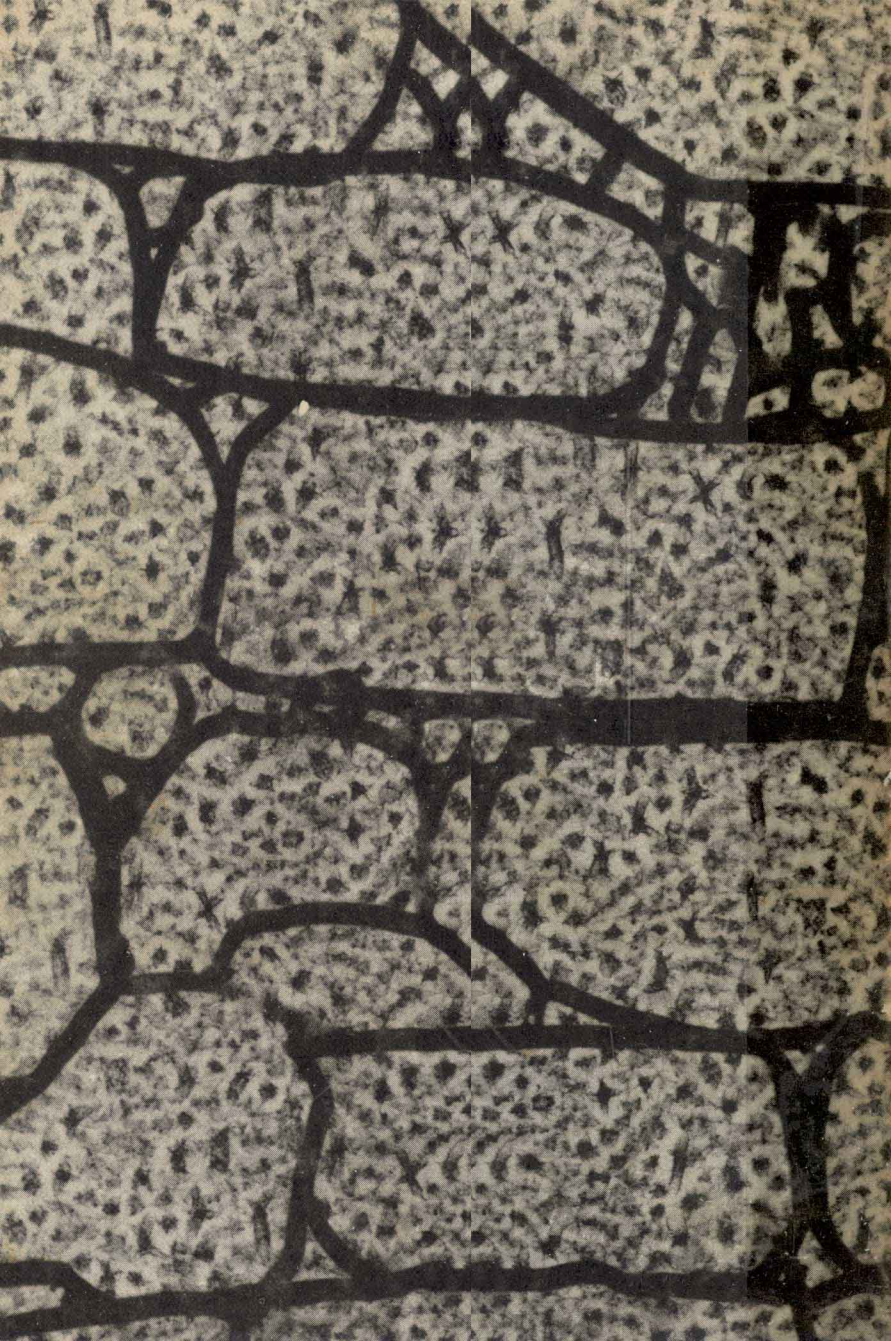
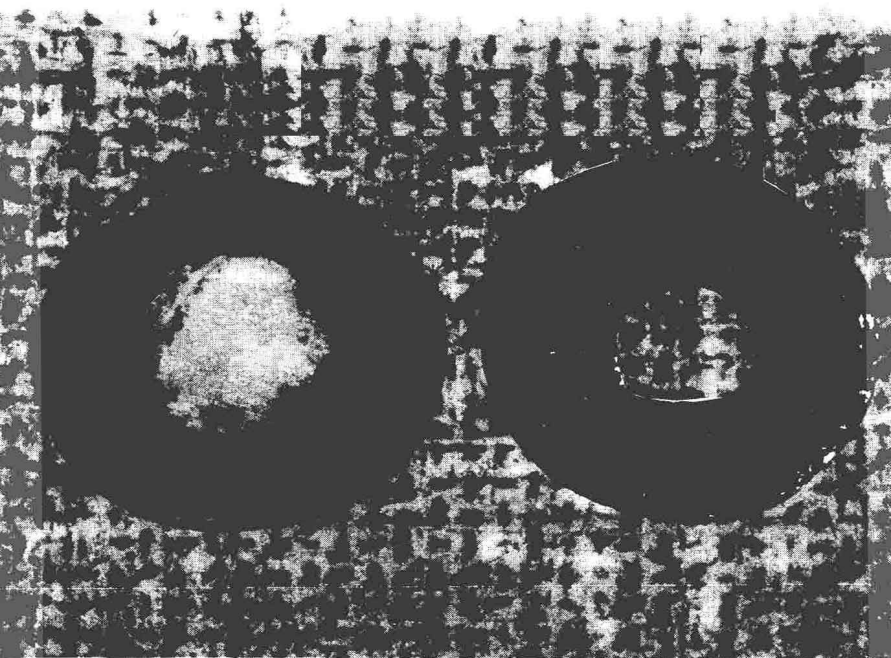




加藤清正

母と子の巻

村上元三



東京文藝社

加藤清正

―母と子の巻―

二八〇円

昭和三十四年十月十五日印刷
昭和三十四年十月二十日発行

著者 村上元三

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

東京都渋谷区代々木上原町一三三八
振替口座番号・東京二一七五七

加
藤
清
正

—母と子の巻—

夜の嵐……………	侍の卵……………	長浜の城……………	一棒丸……………	虎之助と母……………	生と死……………
二六	七	九	四	二六	五

元服……………二七

戦雲……………二五

一番槍……………二七

陣中講釈……………二〇九

感状……………二四

鳥取城攻め……………二七

生と死

「なんだ、あれは」

「井戸へ落ちた、と言っている」

力士と才八の二人は、夜叉若やしゃわかの馬になって峠道を進みながら、村のほうを見た。

「あばれるな、馬」

そっくり反って夜叉若は、二人を叱りつけた。

力士のうしろ帯に才八がつかまり、その才八の背に夜叉若はまたがつて、細い竹を鞭にしている。

「威張るな」

と力士が、振返って、

「そんなに威張ると、振り落すぞ。鍛冶屋の子」

「なにッ」

夜叉若の大きな眼が、もつと大きくなった。

三人とも同じ十三歳だが、夜叉若が一ばん背が高く、身体も大きいし、力も強い。

しかし、ただ頭のとっぺんに結んだ、ばさばさした髪や、脛きりの短かい布子は、三人とも同様で

あった。

「何をいう」

夜叉若は、大きな声で、

「父御が武士というのは、三人とも同じだぞ。わしの父御が鍛冶屋なら、お前たち二人の父は、いまは百姓ではないか。黙って進め。村で何かあったらしい」

といって、両足でぐいぐいと才八の背中をはさみ、力士の頭を押した。

「痛い。おとなしく乗っている」

夜叉若の足の下から、才八が悲鳴をあげた。

「では、おとなしく進め」

夜叉若は、得意そうな顔をして、

「お前たち二人は、何をしてもわしにはかなわぬ。だから、わしの家来になったのだぞ」

「わかつている」

まん丸い顔を、ふうつとふくらませるようにして、力士は、畔道を村のほうへ進みはじめた。

この尾張国愛智郡中村は、熱田の宮から五十町ばかりのところにあり、天正二年のこのころは、茅葺き屋根の家が、五六十戸しかない小さな村であった。

晴れた春の空に、雲雀のさえずる声がしている。

田や畑から、村の中のほうへ、どんどん走って行く人影が見える。

「早うしろ」

「繩を」

などと呼ぶ声が、夜叉若たち三人が村へ入って行くにつれ、はつきり聞える。

「なんだ、どうしたのだ、お爺」

力士と才八の馬の上から、夜叉若は、そばを走り抜けて行く吾介老人に声をかけた。

「井戸へ落ちたぞ」

振返つて吾介は、黄色い齒を剝き出して、

「お前の仲良しが」

「誰が落ちたのだ」

「三江坊じゃ」

「なに、お三江が」

いそいで夜叉若は、才八の背から飛びおりると、

「家来たち、ついて来い」

二人へ声をかけた。

「家来家来と、えらそうに呼ぶな」

不服そうな顔をしたが、それでも力士と才八は、夜叉若のあとに続いて走ってきた。

村のまん中に古い井戸がある。

大ぜいの村人たちが、井げたから中をのぞいて、

「早う繩を垂らせ」

「まだ、もがいている。急げ、急げ」

口々に喚き立てるだけで、どうしていいのか判らぬらしい。

村人たちを押しのけ、夜叉若は井戸の中をのぞいた。

深い井戸の底で、きらきらと光が揺れている。小さな人影が、水の面でもがきながら、石につかまろうとしているのが、ぼんやりと見えた。

すぐに夜叉若は、裸になった。

そこへ村人の一人が、繩を持ってきたのを見ると、引たくるようにして自分の身体に縛りつけ、井げたへ足を乗せながら、

「これだけの繩では足りぬ。帯でも紐でもよい。長くつないで引っぱってくれ」

てきばきと夜叉若のいったのが、まだ十三歳の少年とも思えぬ風であった。

大人たちが、夜叉若に指図され、その繩に帯や紐などを次々に結びつけた。

そうやっていううちに、夜叉若は井げたから、するりと井戸の中へ身を入れた。

井戸の内側は、石で畳んである。

その石の一つ一つに手や足をかけ、夜叉若は、身軽に井戸の底へ下りていった。

「お三江どの」

夜叉若は、声をかけた。

「いま助けに行くぞ」

そのとき、もう力もつきたのであろう。ことし八つの三江は、小さい手をあげたまま、ぶくぶくと水の中へ沈んでしまった。

いきなり夜叉若は、水に飛び込んだ。

夜叉若の身体を縛ってある縄が、びいんと張った。

ぐんぐんと冷たい水底に引き込まれる前に、夜叉若は、右手で三江の着物の襟をつかんだ。それから水の上に浮き上ると、夜叉若は、石に左手をかけた。

小さい三江は、もう気を失っているらしい。

三江は、この中村の庄屋岩六の娘であつた。

「もう大丈夫だぞ」

声をかけ、夜叉若は、両手でしっかりと三江を抱きかかえ、一息ついて、

「引き上げてくれえ」

井戸の上へ、声をかけた。

「よし」

それまで息を詰めてのぞき込んでいた村人たちが、力を合せて、

「よしよ、よしよ」

声をかけ、繩を引き上げはじめた。

対手がいくら八歳の娘でも、氣を失っているのを抱いているのは、夜叉若としても、せい一ぱいであつた。

引き上げられるにつれ、ごつんごつんと夜叉若の頭や背が、石に当る。その痛さを、夜叉若は耐えた。

「よいか。それ、もう一息だぞ、夜叉若」

井戸をのぞきながら、力士や才八のはげましている声が聞える。その中に、女の泣声が交つていた。

三江の母の、庄屋の女房おさんだな、と氣のつくほど、夜叉若には余裕が出ている。

引き上げられる途中、夜叉若の頭や身体は、井戸を内側から疊んである石に打つかり、ひどく痛い。夜叉若は、声一つ立てない。

もう三江が救われた、と思うと繩を引いている村人たちも、よけい元氣が出てきたのであろう。

「よしよ、よしよ」

声を合せて縄を引くので、三江を抱いたまま夜叉若は、やたらに頭や身体を打つけられながら、ようやく井戸の枠から顔ののぞくところまで上った。

「それ、三江どのを受け取ってくれ」

と夜叉若がいうと、庄屋の岩六はじめ数人の村人が、いそいで三江を抱きとった。

水は、あんまりのんでいないらしい。だが、八歳の三江は、恐怖に衝撃で氣を失ったようであった。

「よいしょ」

井げたに両手をかけたが、さすがの夜叉若も自分ひとりで上る力はなく、井げたにつかまったまま、息をついた。

にわかに水の冷たさが蘇り、井戸の底から這い上ってくる冷気が、夜叉若の身体をしめつけた。

「大丈夫か」

力士と才八が手をかし、夜叉若を引き上げながら、のぞき込んだ。

「なんでもない」

井げたから地面へ下り、夜叉若は見廻した。

村の者たちは、誰も彼も、三江の介抱にかかりきりで、夜叉若の骨折りをねぎらおうとする者はない。

「しつかりするのだよ、三江や」

泣きそうなおさんの声が聞え、三江を抱いた庄屋の岩六を取り巻いて、みんなは庄屋の家のほうへ走っていった。

あとに残ったのは、力士と才八、それに村の老人の吾介ぐらいのものであった。

「ようやったな」

と吾介はそばへよつてきて、

「三江坊は助かった。お前のおかげじゃ。だが、おとなというのは勝手なものだな。お前に礼をいうのを忘れておる。庄屋どのと女房どのが、そうじゃ」

「礼など、どうでもいい」

濡れた身体を、自分の布子を丸めて拭き、むつと唇を結んで、夜叉若は、布子を着た。

自分や力士、才八などが、村中でも手のつけられぬ暴れ者で、庄屋たちから嫌われている、と十三歳の夜叉若は、よく承知をしているのであった。

夜叉若の父は、もと加藤弾正右衛門清忠といい、その父の因幡守清信は、美濃の斎藤道三の旗本であつたが、織田信長の勢と犬山で戦ったとき討死したという。

その子の弾正右衛門清忠は、美濃国から逃れ、この尾州中村へ移り住んだ。

母の縁者の清兵衛という人が、ここで農具鍛冶を家職としていたので、その家に世話になつてい
るうち、清兵衛の妹娘いとを女房にもらい、自分も鍛冶屋になる決心をした。

のちに清兵衛夫婦が世を去つてから、彈正清忠は、舅の清兵衛の名を継ぎ、いまでは鍛冶屋の清兵
衛で通つてゐるが、夫婦の中に生れたのが夜叉若であつた。

力士も姓は森本といい、祖父は細川高国に仕えていた侍だし、才八も飯田という姓があり、どちら
も侍の子だが、いまでは父がこの中村で百姓をやつてゐる。

力が強いのは夜叉若が一番だし、力士も才八も、夜叉若の家来に扱われているが、となり村の少年
たちと喧嘩するときなど、三人が揃つて出て行くと、向うはそれを見ただけで逃げてしまう。

「お三江を助けてやつても、庄屋どの夫婦も、有難いと言ひうではない」

と力士が、丸い顔をふくらませ、吾介老人を睨みつけるようにして、

「夜叉若が井戸へ下りねば、お三江はもう死んでいたであらうにな」

「よせ」

夜叉若は、さっぱりした笑顔を見せて、

「おとなと、われらとは、べつじや。さあ遊ぼう」

「また馬になるのか」

才八が、うんざりした顔をした。

「いやか」

夜叉若は、眼を剝いた。こんなとき夜叉若の眼は、ぱちんと音がするくらい、二倍ほどの大ききになる。

「いやとは言わぬ」

両手をあげ、才八は、自分の頭を抱えた。夜叉若の拳が飛んでくるのを警戒したからであつた。

「早う馬になれ。こんどは力士が鞍だ」

夜叉若にいわれて、力士は、不服そうな顔をしたが、言う事を聞かないと殴られるので、しぶしぶ才八のうしろへ廻り、帯につかまつた。

「よし、権現の森まで野駈けだ」

といつて、夜叉若が、力士の背に乗ろうとしたとき、村の道を叫びながら走ってくる男がいる。

「若どの、早う、早う」

自分の家にいる職人の次作であつた。

「なんだ、次作」

「親方が」

「なにつ」

「親方が大変じゃ」